

令和7年度 神奈川県立相模原中央支援学校 学校運営協議会開催結果

本校の学校運営協議会を次の通り開催しました。

審議会等名称	令和7年度 神奈川県立相模原中央支援学校 第2回学校運営協議会		
開催日時	令和8年3月2日(月) 13:30~16:00		
開催場所	相模原中央支援学校 地域生活支援室、会議室		
出席者	学校運営協議会委員 6名(本校校長を含む) (4名欠席)		
次回開催予定日	※今年度終了		
問合せ先	相模原中央支援学校 副校長 榎本 郁子 電話 (042)768-8510		
掲載するもの	議事録	議事概要とした理由	
審議・会議経過			
<p>1 学校運営協議会</p> <p>(1) 学校長挨拶</p> <p>本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。</p> <p>今年度のまとめに当たりまして、学校評価のアンケートなどから、皆様のご意見を頂戴したいと思います。</p> <p>(2) 本日の予定(副校長)</p> <p>授業参観、学校評価部会報告、意見交換、学校長挨拶、場所を移動して切れ目ない支援部会報告、地域連携部会の流れで行う。</p> <p>2 授業参観</p> <p>3 学校評価部会</p> <p>【教務グループ】</p> <p>(視点1-①) 1年間の目標 「子どもの「できた」を支援する授業を実践する」に対する成果として、子どもの「できた」を引き出す授業を実践し、その理由や改善点について考えることができた。校内アンケートでは「できた」を引き出す授業を実践できたとする回答が77%を占め、「とてもできた・できた」と感じた理由には、生徒の自発的な動きや発言が見られたこと、生徒自身が「できた」と実感したことなどが挙げられた。一方で、「あまりできなかった」理由としては、子どもの実態を十分に把握できず、難しい内容を選んでしまったことや、授業準備の時間が不足していたことが挙げられた。</p> <p>課題として「子どもの実態をつかむこと」が最も多く挙げられ、これに対しては個別教育計画の活用が重要と考えられる。定期的な確認や更新を通じて、目標と実態のズレを減らし、より効果的な授業を行うことが必要である。また、教員が子どもの「できた」をイメージした授業を行うことで、子どもが「できた」を実感する機会を増やせると考えられる。</p> <p>改善に向けた方策として、授業の振り返りや実践を学校全体で充実させるため、他者の視点を取り入れることが重要である。現在、授業前のベースミーティングや授業後の改善検討会を実施しているが、改善点の検討が中心であり、子どもの姿に関する議論が深まっていない。今後、改善検討会で「子どもの姿」に関する見立てを深め、評価基準や教員間の目線を統一することで、「できた」を引き出す授業の実践がさらに増えると考えられる。</p> <p>【研究研修グループ】</p> <p>(視点1-②) 1年間の目標「授業改善を進め、専門性の向上を図る」に対する具体的な取り組みとして、「チームによる授業検討会」を実施し、授業改善を進めた。アンケートでは、参加者や授業者の意見から学びや気づきを得られたとの回答が96%の教員から得られた。役割分担を明確にしたことで授業討論会が充実したとの意見もあった。今年度は13のチームを編成し、3クールで</p>			

計 39 回の授業検討会を実施。学部部門ごとに研究テーマを設定したことで、視点が明確になり、日々の授業や指導支援の改善につながった。

さらに、研修会や学習会を実施し、専門性向上を図った。講演会を年 2 回開催し、教材教具や指導法の工夫も行った。

(視点 2-②)「一人ひとりのニーズに応じた端末活用の実践を進め、学びの拡充を図る」という目標に関して、研修会や学習会を通じて、実践例の共有や共通教材の作成・活用を行った。次年度は研修や学習会、実践例の情報共有をさらに進め、一人ひとりのニーズに応じた活用を充実させ、学びの拡充を図りたいと考えている。

【総務グループ】

(視点 2-②) 1 年間の目標を「通学支援を利用して、安全に通学することができる体制の整備をすすめる」こととし、今年度、新規で福祉車両利用の通学支援事業を開始し、福祉車両利用の児童生徒が 6 名となり、さらに 4 月から 1 名が利用予定。利用者数や利用回数が増加している。課題として、訪問看護事業所や福祉車両事業所との情報共有の徹底が挙げられる。改善策として、保護者・事業所・学校の 3 者間で児童生徒の体調や通学方法の変更などの情報を綿密に共有し、漏れを防ぐ必要がある。

(視点 5-②) 災害時に安全で安心して過ごすことのできる環境の整備に取り組む、という 1 年間の目標に対する達成状況として、10 月に火災報知機や防火シャッターを活用した避難訓練を実施。課題として、2 階階段前の防火シャッター作動時に 1 階側から入れない構造が判明し、避難経路や応援経路の確保が必要となった。改善策として、防火シャッター作動時の経路を確認し、来年度にシミュレーションを行う予定。

(視点 5-③) 関係機関と連携して、不審者対応訓練に取り組み、全員で対応方法を共有するという 1 年間の目標に対する達成状況として、日時を設定せずに不審者対応訓練を実施し、リーダーを決めて指示に従い訓練を実施した。課題として、不審者に直接対応した教員が課題を振り返る時間を設けられなかった点が挙げられる。改善策として、訓練の様子を撮影した動画を活用して振り返りを行い、全員で反省を共有し、万が一に備える計画を立てる。

【支援連携グループ】

(視点 3-①) 卒業後の過ごしをイメージした学習の充実という点において、進路支援専用サイト「進路ステーション」を開設し、進路情報を発信。生徒が気軽に見返し、授業の理解を補足できる教材として役立っている。しかし、活用が十分に浸透していない点が課題。改善策として、授業内での活用場を増やし、進路説明会で活用例を紹介するほか、教員用タブレット端末に動画を添付して共有し、使用しやすい環境を整える。

(視点 3-②) 地域の学校と連携・協力し、子どもの社会性を育む教育の充実という点において、10 月 18 日に第 4 回ぎんがボッチャ大会を開催し、大会が地域に定着し余暇活動の一つとして位置づけられた。今後は「相模原地区障害児・者作品写真展」の幹事として関係機関と協力し、魅力的な展覧会を目指す。また、夏季研修会では新しいパラスポーツを紹介予定。

(視点 4-①) 地域の学校と連携・協力し、子どもの社会性を育む教育の充実を図るという点において、共和小学校との学校間交流を実施し、相互理解を図ることを目的とした。課題として、交流で得られた相互理解を日常的な連携や継続的な関わりにどうつなげるかが挙げられる。交流後に振り返りを行い、見通しを持った交流ができるよう連携を深める方針。

(視点 4-②) センターの機能の充実を図るという点において、今年度も保育園から高等学校ま

で巡回相談を実施。近隣小中学校3校から「児童にとってプラスになった」「教員として大きな気づきがあった」など高評価を得た。一方で、「巡回相談を知らない」「依頼手順がわからない」という意見も半数あり、周知が課題。地域の学校のニーズを精査し、それに応える情報をまとめていく必要がある。

【管理職・副校長】令和7年度 学校評価に係るアンケート結果

・アンケート概要

保護者アンケートの回答率は68%だった。教員アンケートの回答率は100%だった。保護者からは本校の学校経営に対する御理解を得られた。

・視点別結果

1. 教育課程・学習指導

保護者の95%が「AB」と評価。一方、教員の評価では「AB」が87%で、「C」が9%。保護者の満足度に対し、教員が控えめに評価している傾向が見られた。教員は自信を持ち、保護者と連携して学習指導に取り組んでいく。

2. 幼児・児童・生徒指導・支援

保護者の「A」の割合は57%。背景にはICT活用の場面を直接見る機会が少ないことや、医療的ケアを行っていないお子さんがいることなどが考えられる。教員の評価では「B」が56%。課題解決に向けた研修・実践、関係機関との連携が必要。

3. 進路指導・支援

保護者の「CD」の割合が13%。進路指導への期待が高いことが伺える。また、子どもの成長や卒業後の過ごし方をイメージするのが難しいという結果が示された。教員の「CD」は23%で、特に余暇支援への課題を残した。

4. 地域との協働

教員の「CD未記入」が24%。センター的機能に関して、直接的に担任が関わることが少なく、評価することが難しいという課題がある。

5. 学校管理・運営

保護者・教員ともに御理解いただいた。しかし、教員の回答では「授業準備や教材研究の時間確保」に関する項目で「未記入」が38%であった。働き方改革（電話自動応答や電子システム化など）を進めたが、教員の実感が薄いことが課題。より良い授業づくりのために、引き続き働き方改革を推進し、教職員の豊かさを目指す。

・今後の学校への期待

保護者が期待する項目のトップは「進路支援の充実」、次に「自立と社会参加に向けた授業実践」、3番目は「教員の教育力・専門性・チーム力の向上」。これらの期待を受け止め、より良い学校づくりを進める。

・まとめ

今後も安全・安心な学校づくりを目指し、保護者・教員からの「CD」評価を真摯に受け止め改善に努める。以上がアンケート結果の報告である。

○意見交換

【副校長】授業参観での実習報告場面で、卒業後の切れ目ない支援という観点で何か感想はあるか。

・卒業を目前に控えた場面を見られてありがたかった。個別教育計画について質問し、教務グループより「半年に1回、目標設定と評価を行っている」と回答があった。松ヶ丘園でも個別支援計画があり、「ベースミーティング」の授業づくりが良いと感じた。

・保護者として、進路や近い将来についての情報が不足している不安を感じる。進路や将来に関する具体的な情報提供を求める。

・高等部の実習報告会で、3年生の成長や社会へのつながりを感じた。学校評価アンケートで高評価を得ている点に感心し、交流に感謝している。以前、中央支援学校の子どもたちが交流を楽しみにしていると聞き、嬉しく思った。

- ・卒業式に向けた授業では、教員・子ども・保護者の思いが凝縮されていた。実習報告会での3年生の発言の重みを感じた。学校評価に関して、各グループの取り組みがわかりやすく素晴らしいと感じた。
- ・教育課程では、子どもの「できた」に関する評価が次年度の取り組みに反映されている。授業検討会では役割分担や見える化の工夫が改善につながっている。
- ・ICT活用（プログラミングやアプリ）は大学でも活用したいと感じた。通学支援については、事業所探しの大変さを理解し、進路ステーションの授業活用が有効だと感じた。
- ・全職員が同じ目標に向かって取り組むことが重要。インクルーシブ教育について、4年間の目標「共生社会づくりの実現」に向けてどのように展開・評価していくのか、教職員や保護者のイメージを知りたい。今後の取り組みに期待している。

○学校長あいさつ

多くの意見をいただき感謝している。学校運営では、子どもとの向き合い方や保護者との連携を共有・理解することが、大規模な学校では難しい状況もあるが、計画的に進められているのは保護者や地域の協力のおかげである。保護者が安心して子どもを送り出してくれることで教育活動が成り立っている。今後も保護者や地域と連携し、より良い学校づくりを目指していく。

休憩・移動

4 切れ目ない支援部会

(1) 今年度の振り返りと目標

在校生・卒業生が生涯にわたり切れ目なく健康作りができる場を提供するため、地域とともに様々な活動を実施。学校目標の視点3「進路指導・支援の将来を見据えた地域生活充実」を基に、余暇活動や障がい者スポーツの促進を目標として取り組んだ。

(2) 具体的な活動

1. ぎんがボッチャ大会の実施

第4回ぎんがボッチャ大会を10月に開催。広報活動や地域との協力を工夫し運営を改善。夏の公開研修会では、神奈川ボッチャ協会の講師を招き、ボッチャ体験会を実施。

2. パラスポーツ用具の貸し出し

デフリンピック開催に合わせ、光刺激スターターを福祉団体に貸し出し。ホームページや電話で申し込みを受付中。

3. スポーツ以外の余暇活動の広げる取り組み

授業での余暇教育や地域資源の活用を実施。地域の方を講師として招くためアンケートを実施したが、活用には至らず。アンケート内容や地域調査の改善が課題。

4. 地域への活動参加

地域イベント参加、美化活動、作業学習を通じて地域との連携を進めた。

(3) 次年度の方向性

- ・パラスポーツの取り組みを定着・進化させる。
- ・地域資源の活用や連携をさらに進める。
- ・今後の余暇活動や地域機関との連携案についてアイデアを募集。

(4) まとめ

子どもたちの自立と社会参加を目指し、地域と連携して取り組みを続けていく。

今後も協力をお願いしたい。

(5) 意見交換

- ・余暇活動（手芸・スポーツなど）について要望があれば講師を紹介可能。商店街はイベント開催に慣れており、本校駐車場でパンやコーヒーの販売、ハンドメイド作品の販売などのイベントが可能。ライオンズクラブやB型事業所とも連携可能。
- ・けやき体育館や公民館でボッチャやパラスポーツが行われており、公民館との連携が可能。車いすバスケ講座やフライングディスク講師派遣など、外部の力を活用するのが良い。
- ・総合的な学習（探究）の時間でダンスやフラワーアレンジメントなどの講師を商店街から紹介可能。卒業後、地域団体への参加者についての確認が必要。神奈川パラスポーツ協会では講師費用の補助（32,000円）があり、ブラインドサッカーなどの講師派遣も可能。
- ・高等部の作業学習や校内外の実習では、心構えや礼儀をプロから学ぶことで生徒に刺激を与えられる。
- ・淵野辺小学校と連携し、小学生と一緒にメニューや価格設定を考えた販売活動を実施。商店街では駅周辺の清掃や花壇整備などの活動があり、こうした地域活動でも連携が可能。

5 地域連携部会

(1) 今年度の取り組み 学校目標達成に向け、次の活動を実施：

- ・小学部：共和小学校との児童間交流、地域の小学校23校で居住地交流（31名参加）、外部講師による体験講座。
- ・中学部：12校の中学校で居住地交流（15名参加）、外部講師による体験講座。
- ・高等部：食品加工班が製造したパンを流通班が販売。環境整備班が地域のディーラーで洗車体験、共和小学校で窓清掃を実施。
- ・学校全体：相模原弥栄高校の生徒による吹奏楽やダンス発表、地域資源を利用した買い物学習、校外散歩、プラネタリウム鑑賞、スケート体験などを実施。

(2) 成果

- ・パン販売・清掃活動：社会経験の広がり、社会貢献の意識や主体性、自己肯定感の向上、進路選択のきっかけ、地域とのつながり意識の醸成。
- ・居住地交流：地域の同学年との関わりを通じた経験の広がりや相互理解。
- ・外部講師、高校生の発表：経験や興味関心の広がり。近隣高校生との交流はインクルーシブの観点から相互理解のきっかけに。
- ・地域への成果：本校の活動を知ってもらい、パン販売などで喜ばれた。教員間交流を通じて障害者理解や支援学校についての認識が深まった。

(3) 来年度に向けて

- ・近隣学校との交流を通じた相互理解を促進。
- ・清掃活動やパン販売、地域イベントへの参加を通じた地域貢献と子どもたちの自己肯定感の向上。
- ・地域の方々と同じ活動を行う機会を増やし、連携を深めたい。

(4) まとめ

- ・地域との連携を活用し、子どもたちの社会参加や自己肯定感をさらに高めることを目指していく。

(5) 意見交換

- 共和小学校との交流は回数を重ねることで子どもたちの対応に変化が見られ、成果があった。次年度も継続していきたい。
- 居住地交流は、障害を持つ子どもたちへのアプローチや関わり方に新たな発見があり、教員にとってもメリットがある。
- ふれあいフェスタでの販売活動を通じて、地域の方とのやり取りを経験し、本校を知ってもらう良い機会となった。
- 居住地交流で招待される側の活動になりがち。地域イベントに障害のある方が参加しやすくなるためのアイデアを意見交換したい。
- 楽しい選択肢を増やすために出かける一方、過去の嫌な経験を思い出すこともある。
- コンサート会場などで支援制度が整っていても、会場に行くまでの支援も必要。